真実なる対話を求めて

佐古純一郎

真実なる対話を求めて

佐古純一郎

日本基督教団出版局

佐 古 純一郎

1919年徳島に生まれる。二松学舎専門学校、日本大学法文学部宗教学科卒業。現在、二松学舎大学教授、日本基督教団中渋谷教会牧師。

住所 〒188 田無市南町1の13の3

真実なる対話を求めて　　定価480円

1969年7月30日　初版発行

著　者　佐 古 純一郎

日本基督教団出版局

発行者　壺 井 正 夫

印刷　伊坂美術印刷所　　製本　市村製本所

発行所　日本基督教団出版局　郵便番号 104　東京都中央区銀座4の5の1
振替 東京 145610 電話(561)6131(代)

落丁・乱丁の際はお取替えいたします　　© 佐古純一郎 1969

まえがき

読書を対話として生活のなかに確立したいというのが私の願いであります。たまたま、日本出版販売株式会社（日販）の弘報課から発行されている「新刊展望」に、一か年半にわたって、私が任意の新刊書を選んで、その紹介をするということをひきうけ、私なりに著者と対話するような気持ちで試みたのがⅡの部分に収めた三〇のエッセーであります。もちろん、それが言葉の完全な意味での対話になりきっていないことは、私自身が十分に承認していることであります。しかし、これは私にとっても貴い体験であったと思っています。

Ⅰの部分には、「読む」という行為について私なりに反省した文章をとりあつめ、序文のような気持ちで収めました。さらに、Ⅲの部分には「近代日本文学とキリスト教」という私自身の批評の中心をしめる問題をめぐっての四つの評論を収めました。このような形で、一冊の書物にすることができたことについて日本基督教団出版局の方々の友情を心から感謝するとともに、この

ささやかな試みが、読者の読書生活に何かのお役に立つことができるなら、私はほんとうに幸福であります。

一九六九年六月六日

佐古純一郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

目次

まえがき……一
I 読書について……七
一、対話としての読書……8
二、読みの深さということ……15
三、文学をどう読むか……26
四、「人生論」の意味……34
II 真実なる対話を求めて……四九
一、対話の生活……50
二、愛と性の悩み……56

三、考えさせられること……62
四、神はどこにいるのか……69
五、人種的偏見をなくするために……75
六、「アメリカ」というイメージ……81
七、亀井勝一郎氏を偲ぶ……87
八、旅する心……94
九、いのちの調べ……100
一〇、風変わりな聖書物語……108
一一、日本人のこころ……115
一二、故郷とは何か……122
一三、本居宣長と現代……128
一四、乞食王子……134
一五、神は死んだか？……141
一六、一粒の麦……147
一七、死の相の下に……154

一八、徹底したヒューマニズム……161
一九、民衆の解放運動……167
二〇、邪馬台国と卑弥呼……174
二一、美しい兄妹……180
二二、再び過ちを犯さないために……187
二三、自由ということ……194
二四、運命と摂理……201
二五、愛と死……207
二六、同じ星の下に……213
二七、集団と個人……220
二八、ゲーテに学ぶ……226
二九、人生の苦難について……233
三〇、純粋な愛の道……239
「真実なる対話を求めて」参考図書……246

Ⅲ　近代日本文学とキリスト教……二四九
一、近代日本文学とキリスト教――その戦前と戦後……250
二、木下尚江……268
三、賀川豊彦……285
四、武田泰淳の『わが子キリスト』論……299

（装丁　明石　健）

I

読書について

一、対話としての読書

1

読書とは、文字どおり書物を読むことであるわけだが、いったい読むという行為の本質はいかなるものであるだろうか。書物は活字によって記された文字がならべられたものとして、たんなる物的存在にすぎないともいえるであろう。そういう文字を読むということは、文字として記されている言葉があらわしている意味の世界に踏み入るということである。意味の世界は、もはやたんなる物的存在ということはできないのであって、それは形而上的な領域と考えることがゆるされよう。それはその書物を書いた人の人格の領域に属するのであって、読むという行為におい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

て私たちは作者の人格の世界に入り込んでいくのである。そこに読書の醍醐味があるといえよう。私にはそれは作者との対話のよろこびとして感得させられるのである。書物がたんなる物的存在として意識されているかぎり、まだ読書は入口で立ちどまっているのである。作者の心の世界に入っていって、そこで作者との対話が始まるとき、もはや書物はたんなる物的存在なのではなく、それは一種の対話の場所という性格を帯びてくるのである。そのような対話性にまで読書を深めていくことが、心の生活としての読書の大事な点であると私は考える。

2

対話とは言葉において人格と人格とがふれ合うということである。心の深いところで生じる通じ合いといってもよい。ただ言葉がかわされているということだけでは、対話が成り立っているといえない。言葉をなかだちとして、「わたし」が真実に「あなた」と出会うということが対話の意味なのである。読書において私たちは、作者とのそのような出会いの体験を持つことがゆるされるのである。いや読書をそこまで深めていくことが大事なことなのである。私の心をそのような読書に開眼させてくれた読書論がある。それは小林秀雄氏の『読書について』という文章であった。小林氏はこんなふうに書いている。

小説の筋や情景のおもしろさに心を奪われて、これを書いた作者という人間を決して思い浮べぬ小説読者を無邪気と言うなら、なぜ進んで、たとえばカントを学んで、カントの思想に心を奪われ、カントという人間を決して思い浮べぬ学者を無邪気と呼んではいけないか。読者の技術のつたないために、書物から亡霊しか得ることができないでいる点では、決して甲乙はないのである。サントブーブの教訓を思い出そう。「ついに著者たちはかれら自身のことばでかれら自身の姿をはっきり描き出すに至るだろう」、それが、たとえどんな種類の著者であってもだ。ついに姿を向こうから現わしてくる著者を待つことだ。それまでは、書物は単なる書物に過ぎない。小説類は小説類に過ぎず、哲学書は哲学書にすぎぬ。

書物から人間が現われるまで待て、と小林秀雄氏はいましめてくれるのであるが、待つといっても、机の上に書物を開いて、ぼかんと待っていても、書物から人間が現われるわけではないのであって、要するにそこまで読みを徹底せよということなのである。

3

読書を対話性においてなすという場合、大切な姿勢は、耳を傾けて聴くというへりくだった心

をもって書物に向かうことである。しばしば私たちは、勝手に自分の意見を書物に読みこむことによってとんでもない意味をその書物からひき出している場合がある。それでは著者との対話は成り立たない。現実の生活においても対話の成り立つ条件は、まず相手の言葉に対して、一〇〇パーセント耳を開いて聴くということであろう。聞く耳を持つといってもよいかもしれぬ。お互いに自分の意見だけは主張したがっても、相手の言葉に耳を傾けることをしたがらないのが、今日の状況なのかもしれない。まず相手の言葉に耳を傾けるということが、学ぶ者の態度である。読書を意義あらしめるものは、何よりもそのような学ぶという心なのではなかろうか。

現実の対話では、相手は一度だけしか語ってくれないであろう。同じことを何度も尋ね訊くことはたいへん失礼なことである。読書のありがたい点は、何度でも、了解がつくまで聴くことができることである。文字どおり、何度でも繰り返して読むことができるのである。わからないということは、多くの場合、読みが足らないということである。古人が「読書百遍意自ら通ず」といったのは、たしかに読書の知恵をのこしてくれた貴い体験の告白というべきである。文字どおり百遍読んだのである。百遍読むことで、書物の向こうから現われてくる人間を待ったのである。それは今日も変わらない読書の初心といってよいものなのであろう。初心忘るべからず、ということがあるがその意味が自ら通じるまで、読むという行為に自らゆだねたいものである。

4

対話としての読書において、何よりも大切な態度として、学ぶ心ということを私は考えてきたのであるが、さらに、そのことを発展させるとき、そこにもうひとつ、問うということが考えられるのである。学問するということが、文字どおり、学ぶことと問うことを意味しているのであるが、「われ問い、汝答う」というところで、「わたし」と「あなた」との対話は成り立つものである。問う心は真剣に答えを待つ心でなければならない。答えを聴くことなしに、せっかちな独断で思い込みの判断を下すことはつつしむべきことである。書物を読んでいて、わからないことがしばしば出てくるであろう。もちろん、言葉の一般的な意味がわからないというようなことについては、字引きのようなものについてわからせることもできる。しかし、著者自身がそこで何を表現しようとしているかは、著者自身に問うほかないのである。読むことに聴くという意味があったように、さらにまた、読むことには問うという意味があるのである。問うときに答えられる。そこに対話ということが成り立つのだというべきであろう。

しかしまた、著者から問われるということを忘れてはならない。自分はこのように考えるけれども、あなたはそれに対してどう思うかということが、断えず問われるであろう。その問いにど

う答えるかということで、また読書における対話が開かれてくるであろう。そのような対話の味をおぼえると、読書はほんとうに充実してくるものなのである。

対話のよろこびはともに考えることのよろこびであるともいえよう。著者の訴えんとするところに耳を傾けて聴き、著者に問うことにおいて応答を得、さらに著者から問われることに誠実に応答しつつ、私たちは、著者とともに考えるのである。そこに対話としての読書の真の面目があるのだと考えられる。

5

そのような対話が、時間と空間を超越していまこの場所でゆるされるということ、読書の感激はそのことにきわまるといえるのであろう。私はドストエフスキイの文学をこよなく愛するのであるが、『罪と罰』の文庫本たった一冊あれば、私はどこででもドストエフスキイと対話することができるのだし、ドストエフスキイとともに考えることができるのである。ドストエフスキイが一九世紀の、しかもロシアの人であったというようなことは、私との対話をなにひとつさまたげはしないのである。

『罪と罰』などは、もう私は何十回も読んでいるので、眼を閉じると、すぐにネバ河のほとり

をうろついているラスコーリニコフの姿を見いだすことができる。作品のデテールがひとつひとつ意味を投げかけて、私の心の中によみがえってくる。ふっとわからなかったことが、ああそうだったのかとわかることがある。ドストエフスキイがそれを語ってくれるのである。答えはいつやってくるかわからない。要するに、私はいつでも、ドストエフスキイと対話する姿勢で、ラスコーリニコフの運命を思いつづけるのである。

そのような愛読書を持ちうるということは、何というしあわせであることだろう。書物を通して古今東西のすぐれた魂を友として与えられるということは何という大きなよろこびであることだろう。このような幸福を真実に生活の中心に持ちうる者は、けっして自己の孤独を粗末にできない。孤独を愛することができるのである。深夜にひとり古典をひもといて心静かに古人と対話するというような読書の味を私たちは忘れてしまっているのかもしれないのだが、現代がそういう時代なのではない。私たちが真実なる自己をどこかに見失っているだけのことなのである。

偉大なる魂が、私たちを対話に招いている。私たちの方から心の窓を開いて、訪ねさえすれば、いまここで、たちどころに対話のよろこびは約束されているのである。要するに私たちが読書の生活を対話性にまで深めるということをしないだけのことなのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook